

77

特 249

32

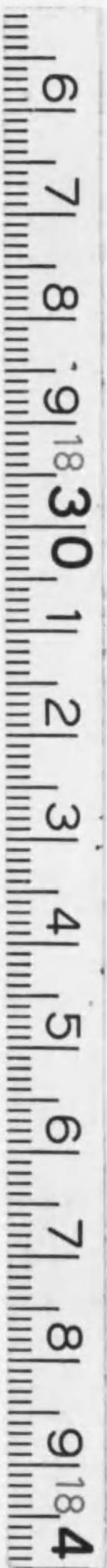
日本教育資料刊行會編

國家中心主義の人
前日ソ石油會長

松方幸次郎氏

(附) 支那事變と我が財政

發行所 日本教育資料刊行會

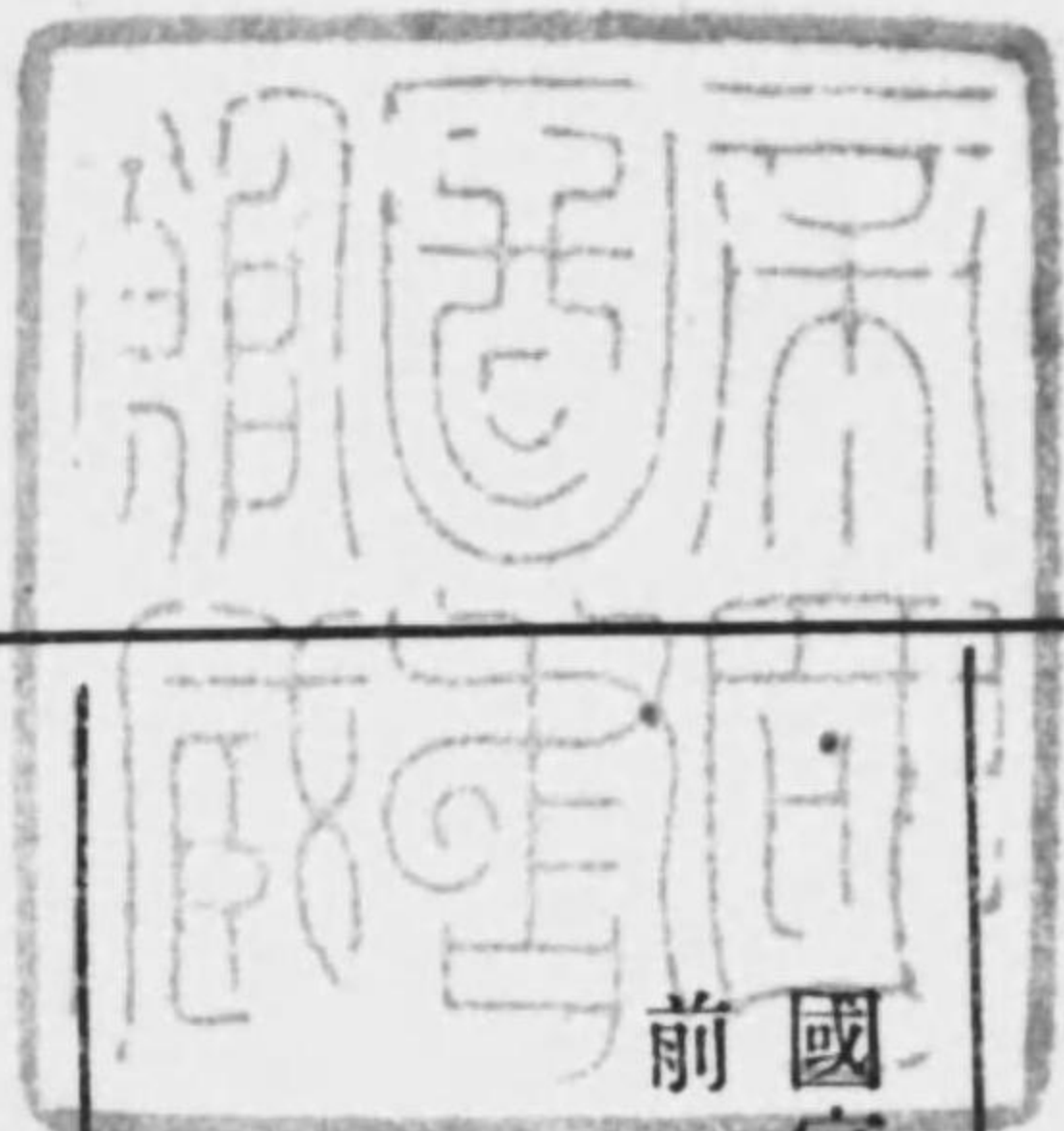


始



32
7

特249
32



日本教育資料刊行會編

國家中心主義の人
前日ソ石油會長

松方幸次郎氏

(附) 支那事變と我が財政

日本教育資料刊行會





松方幸次郎氏



序に代へて

時代が人物を産むか、人物が時代を作るか、それはどちらにも一面の眞理があつて、歸するところは鶏と卵の論争に等しいものである。この兩者の因果關係は姑く置くとして、要するに何れの時代を問はず、卓越せる人物の出ると否とは、國運の消長に密接な關係を有することは論を俟たないところであり、而してこれ等傑出せる人物によつて、後進の鞭撻指導せらるゝところは、蓋し甚大なものである。

即ち偉人。名士。成功者は之を歴史と云ふ時間的立場から眺めると、そこ

にある時代に卓越した人物であり、社會と云ふ空間的な立場から見渡すと、ある社會に於て斷然頭角を現した人物である。

然し乍ら人間である以上は、之を縦横に觀察する時には、短所弱點もあり完全無缺なりとは云へないのであらう。然し乍らよく個々に觀察すれば、そこに何人にも到底比較出来ない絶對的な特徴長所があるものである。

ある人はこの優劣を先天的だと云ふ。或は運命だと云ふ人もある。然し是等は一面の眞理ではあらうが、全幅ではない。即ち人間の努力修養が必然的に此等の人々の域に到達し得る事實があるからである。

努力修養は理論ではなく實行であり、體驗によつて得られるところのもの

である。

翻つて現在の世相を觀するに、努力修養の實踐躬行は漸く消失されんとし眼前の利慾に眩暈されて、日々にその個性を忘れ、その一舉手一投足、國民理想と信念に反逆することを痛感せざるを得ない。是れ即ち新なる日本更生の陣痛であり、過渡期であるからである。

此の秋に際して我國民はたゞ徒らに悲憤するのみでなく、國民一致協力して、皇國日本の理想實現に精進しなければならぬ。

日本教育資料刊行會の事業は、斯うした時代に對して國民精神緊張の喚起でありその資料としての名士、成功者の傳記、人物評論、逸話、其他教育資料

等は現代青年の進路に對して、一道の光明を與へる、最も良き實踐躬行の參考書であると深く確信する。

庶幾くば奮つて本會に御加入下され、共に俱に不斷の修養に努力し、堅實なる國家の發展を目指して邁進せられんことを切望するものである。

昭和十三年

日本教育資料刊行會

—(目次)—

春風駘蕩なる心境……………(一)

孤影悄然露西亞への船出……………(三)

慘憺たる造船所管理の苦心……………(六)

濱口・井上兩雄の論敵……………(一一)

氏の氣概を語るエピソード……………(一二)

命がけのスパイ……………(一四)

強き國家觀念……………(一七)

(附) 支那事變と我が財政……………(二三)

國家中心主義の人
前日ソ石油會長

松方幸次郎氏

(附) 支那事變と我が財政

日本教育資料刊行會編

春風駘蕩たる心境

先年、松方氏の露油と例の六社との協定説が傳へられてゐた。
其の年の秋頃。

「ソヴェットの手先となつて赤い油を賣る國賊松方を葬れ！」
と右翼團體から罵られ。

「原油を露西亞から輸入して日本の勞力を加へた製品にしてこそ國家的な事業だが、精油をそのまま持つて來て賣つたのでは、國家の爲めにはならない！」
などと、日石の橋本圭三郎氏あたりから批難せられ、自分では。

「金儲が目的ぢやない、國家の爲めに、安いガソリンを供給するのが俺の本望ぢや」と、豪語しながらも。

「女子と小人は養ひ難し」

の嘆を抱いて、多少クサラざるを得なかつた松方幸次郎氏だつたであらうが——今や、氏の心境は、春風駘蕩たるものであることは、察するに難くない。

東京、大阪數萬の運轉手諸君から熱烈な感謝の聲を浴び、六社側から艶なる秋波を送られる。七十四歳の松方幸次郎氏と雖も、わが世の春を喜ばぬ筈はあるまい。

だが、ここまでは誰も知つてゐる。併し、松方幸次郎氏の露油輸入の決意と、悲惨な露西亞行きの経緯を知つてゐる人は、多くあるまい。

孤影悄然露西亞への船出

昭和六年の夏のことだ。

一人の客が、松方氏の須磨の閑居を訪ふて、石油問題を説いた時、頭の宜い氏は即座に應じて、滔々と石油政策を説き、今にして露西亞と提携せずんばあらずと斷じたものだ。

だから、氏は其頃には既に露油に眼をつけて居たのだつた。けれども、川崎造船社長引退後暫く蟄居してゐた氏には金がない。どうにも手の出しやうがなかつたのだ。

矢張り其頃のことだが、氏の友人が相寄つて、松方救済策を案じ、滿鐵總裁に擬したものだ、松方氏は、

「諸君の好意は有難いが、一年に五萬や十萬の金が入つても仕方がない。百萬以上儲げ

て銀行を救はなくちやならん」
と云つて辭退した。

そこで、愈々露西亞行となつたのだが、友人同意が據出した旅費を綺麗に二分して、一半は家と店に残し、一半はポケットに捻ぢ込んで、悲壯な鹿島立ちをしたものだった。

單身、文字通り孤影悄然、過去二十年の生活を清算して、赤裸々の一個の人間松方として露西亞へ行つたのだ。京都驛までは相當の見送人があつた。京都驛のプラットホームには、前の乾兒數名が寒さうに立つてゐた。

けれども、偉大なる松方氏の心境尙縹々たる餘裕があるやうに見えた。京都まで送つた大毎主幹の岡崎鴻吉氏などは、老松方氏の放談に煙にまかれてゐた。

敦賀まで送つて行つたのは、氏の年來の盟友神戸新聞、大阪時事新聞社長進藤信義氏ただ一人だった、敦賀から船が出る時、那須野にゐる兄の巖氏と、家に残した夫人と二人だけに電報を打つた。

進藤氏は何氣なく談笑する松方氏を見ると、如何にも英雄の末路といふ感が沁々と胸に迫り、九腸寸斷の思ひがするのだった。船の出るまで見送つて、薄暮袂を分つて歸つたが眼頭が思はず熱くなつたと述懐してゐる。

其後、モスコの松方氏から、「萬事好調」といふ電報があつた。

——この間に何かの素晴らしいタイトルが入るところだが——
首尾よく露西亞と石油協定が成立して歸つて來た松方氏は、さながら凱旋將軍の概があつた。

大阪驛に迎えた進藤信義氏の顔を見るや、松方氏は、
「やつたゾ」

と、ただ一言大聲で言つて、進藤氏の手をギュツと握つた。

「露西亞の話など、後だ、後だ！」
と、附け加へながら……

この時の松方氏の顔の相恰はすっかり崩れてゐた。

「出かける時の顔とまるで違つてゐた。あれほど鍛錬された男が……」

と、云つて、またしても進藤氏は涙ぐむのだつた。

そして、松方氏が歸朝した時、有象無象が、ワンスと出迎えに押し寄せたことは云ふまでもない。而もこの露西亞との石油協定は僅か十三日間で成立してゐるのである。

慘憺たる造船所管理の苦心

勝てば官軍といふ心理は、どうも日本人の根性を穿ち過ぎてゐるやうだ。露油の場合のみでない、松方氏が畢生の事業だつた川崎造船の場合には特にさうだ。成程松方氏は、川崎造船の經營には窮極に於て慥に失敗した。昭和二年のパニツクに際會し、十五銀行の破綻の影響を受けて、一敗地に塗れ、事業家としての松方氏は遂に敢なき最後を遂げた。

併し失敗は失敗である。豊臣秀吉が、朝鮮征伐に失敗し、ナポレオンがセントヘレナに

流されたとして、彼等の遺した功績は無下に没し去らるべきではない。と同様に、松方氏が川崎造船所に於ける三十二年間拮据經營の功績は忘れ去るべきものではないのだ。

然かも、健忘症な日本人の多くは、そんな物忘れ、否、最初からそれと認めた人さへ少いのだ。筆者は、そんな連中に對して義憤をさへ感ずるものだ。

だから、ここに、古いノートを引張り出して松方氏の川崎造船經營の慘憺たる苦心談、エピソード、乃至氏の國家的功績を拔萃して、斯る輩を反省させ松方氏を見直して欲しいと思ふのである。讀者諒せよ。

松方氏が川崎造船を引き受けたのは、慥か日清戦争直後の事だ。當時の資本は僅か百五十萬圓、それが歐洲戦争當時、千萬圓になつてゐる。これは數字から見た川崎造船に於ける松方氏の歩みだが、此の間、氏のマネーヂメントの苦心は血と汗とだつた。

當時の我國の鐵工業、重工業は幼稚極まるものだつた。従つて、海軍の兵器は、歐米のそれと比較にならなかつた。その幼稚を以て彼等と競争せねばならず、彼等の侵略に備へ

るために、他の工業と異り、一日も晏如として眠つてゐる譯には行かなかつた。

科學の進歩は敏速だ！ 發明から更に發明へ！。ぼんやりしてゐると高いパテントを買はねばならず、と云つて、當時の政府は、川崎造船に對して酬ゆるところ 甚だ尠かつた。

相手に三菱造船があつたからだ。三菱は何億の金も自由に動かし得るのだが、川崎は百萬圓そこ／＼の金を、然かも日歩何錢と云ふ高利の金をやつと融通して、使つて行かねばならなかつた。

松方氏の經營の苦心は全くひどいものだつた。明治の元勳松方正義公の三男坊に生れた氏は朝の五時頃から夜の八時頃まで、二三人の幹部を相手にオフィスで働き續けた。

そして、其間、三年目か四年目に一度は缺かさず歐米視察に出かけたものだ。

だから、松方氏は實によく歐米の政治や軍事に通曉して居る。

例へば、例の歐洲大戰の動因となつたところのセルビアの一青年がオーストリー太子を

撃つた事件の直後、某新聞記者が電通で報じた「オーストリーの要求」をもつて松方氏を訪問し、

「この要求は通るでせうか？」

と訊いたものだ。

松方氏は

「君にわからんかね。戦争だよ！」

と笑ひながら、斷言した。

明察神の如し、と云ふのだらう。その記者が、後報を持つて、再び松方氏を訪ねた時には、氏も亦東京へも電話をかけて情報を綜合し、すかつり確信を得たものの如くだつたが其時既に松方氏の掌中には、天下分け目の大賭博の賽ころが振られてゐたのだつた。

翌朝、電火の如く大阪市場へ人を派して、鐵板と丸鐵を買占めた。小さな製鐵所などへは、二年間先きまで製品を契約した。

これが、果然當つた。噸百五十圓の鐵が、千五百圓になつた！

氏は同じ戰術で外でも巨利を博した。海軍の船を馬鹿げた高値で入札して手に入れたり一定の型一定の噸數の仕入船を何十隻となく急造した。甚だしきに至つては、一萬噸級の船を一ヶ月に一隻の割で急造し、八九萬噸出來た時、氏はその製品を携へて亞米利加へ行つた。

亞米利加から、更に佛蘭西に渡り、英吉利に轉じ、氏は大膽不敵にも彈丸の下を潜つて巧みに取引を行ひ、瞬く間に三億圓の巨金を動かした。

氏は、かうして一時にして四千萬圓程儲けた。當時の十五銀行の負債を奇麗に償却して二千萬圓現金で残つたと云ふから素晴らしい。

併し、松方氏は根つからの事業家ではない、氏にも誤算があつた。郵船が氏の持船を噸一千圓で買ひ度いと申込んだ。其時、賣れば更に三千万圓は儲かつたのだが、大戰後輸送力一時に興り船舶の需要益々増大すると觀測した氏は、それをにべなくはねつけてしまつ

た。

之は見事な思惑違ひだつた。氏は十數萬噸の船を抱いて

「放蕩息子をつくつたやうなもんぢや」

と苦笑した。

濱口・井上兩雄の論敵

松方氏は早くから或る一部の觀察ではインフレーションだときへ云はれてゐた。然し氏が必ずしも單なるインフレーションだつたと云ふ譯ではない。國家中心主義に立脚して、將來を見透しての所論を熾烈に叫んだに過ぎない。

氏は大戰の好況時代、國民がお札の波に浮かれ廻つてゐる時、既にその後に来るパニツクを豫知して居た。

第何回かの歐米漫遊の途次、ポールドウキンなどに會つて、産業維持の論議を闘はし、

大に肝膽相照らししたものだ。

大正九年頃から、「金解禁すべからず」のパンフレットを書いて、兩院議員に配布し、盛んに井上準之助氏に喰つてかかつたことは有名な事實だ。

松方氏にとつて、井上準之助氏と濱口雄幸氏は偉大なる論敵だつた。今や二人とも故人になつてゐるが、好敵手を失つた老松方氏の心境、一抹の淋しさがあるだらう。

川崎造船華かなりし頃、平民主義の松方氏は監督官（海軍）の連中の尊大ぶりが氣に喰はず、事毎に相反目して居た。

氏の氣概を語るエピソード

それに就て面白い話がある。

川崎造船へ來てゐる海軍の連中は、食堂への通路として、七、八間の地下道を造る計畫を樹てたものだが、松方氏は、

「そんな莫迦なことがあるかそんな贅澤なことは斷じていかんと、眞向から反對した。

併し、氏が歐羅巴へ行つてゐる留守の間に海軍の連中は地下道を造つてしまった。そのことを海外で聞いた松方氏は、カン／＼に怒り、長文の手紙を書いて、

「社員は、海軍の馬鹿共の造つた道を絶対に通るな。そして、その入口へ海馬路と書いて貼つて置け」と發命した。

だが、相手は監督官だ。幹部の連中もこの命令には面喰つて、其儘にして居ると、松方氏は歸朝早々、自ら筆を取つて「海馬路」と書きなぐり、それを遮二無二貼らせたものだ。

海軍の連中、眞赤になつて怒り、それを剥ぎ取ると、又書いて貼らせる。こんな兒戯に類するいがみ合ひから、海軍との溝渠は段々深くなつて行つた。

それから最う一つ其頃、海軍の設計で、輕巡洋艦を造ることになった。造船の知識に於ても玄人裸足だつた松方氏は、海軍の技師に、設計上の不備を指摘し、文句を云つたが、技師に見れば、何を素人がといふブライドから、氏の忠告を一蹴してしまつた。ところが、出來上つて見ると、果して動かない。すると海軍と三菱側は自分達の責任を棚に上げて、

「松方氏は怪しからん！」

と逆宣傳して、松方氏排撃の火の手に油を注いだものだ。

松方氏は徹頭徹尾、海軍と民政黨から憎まれた。そして其後に來たものはパニツクだ。それらが結果して、氏の最後は一しほ敢なきものとなつたのだ。

命がけのスパイ

大戦當時、獨逸の潜水艦が大西洋を横斷して大問題を起した。果然、我海軍部内にも大

きなセンセーションを起し、海軍は密かに三菱に嚴命して、獨逸潜水艦の構造設備を調査させた。併し三菱ではやれぬと云ふことになり、白羽の矢が立つたのは松方氏だつた。

喧嘩相手なのだが、國家的立場から云つて見れば、斷じて私情の介在は許さない。海軍も腰を折つて、松方氏に懇請した。國家觀念の人一倍熾烈な松方氏は立ちどころに應諾このスパイの大役を買つて出て、

「最後の御奉公のつもりで、私自身で行く、再び歸れるかどうかわからんが——」
と、悲壯な決意の下に、水盃を酌み交はして單身出かけて行つた。

まづ亞米利加に入り、それから歐羅巴に渡つた。

日本第一の船成金が、戦争で疲弊した歐羅巴へ、美術のコレクションに出掛けるといふ觸れ込みだ。倫敦へ行つて當時滞在してゐた石橋和訓畫伯を相談相手にして、美術蒐集のカムフラージュに着手した。最初は百五十萬圓程度のもを買ふ積りだつたが、そこは偉大なる坊ちゃん松方氏だ。到頭桁違ひの一千萬圓も買つてしまつた。

尤も、最初はスパイの假面だけの美術蒐集家だったのだが、やつて居る中に、又しても國家觀念が首をもたげ、佛蘭西から買った七千枚百二十萬圓の浮世繪などは、慥に氏一流の正義觀から買戻したものに違ひなかつた、だから、氏が故國の一友人に長文の手紙で

「俺が買戻してやつた！」

と誇らしげに報告したものだ。

然かも、其の頃の氏は大した金がなかつた。繪は逆爲替でドン／＼故國へ送りつけて、留守居の連中の膽を冷させた。

扱て、残るものは、生命を賭したスパイの大役だ。氏は遂に、獨逸の潜水艦の技師を瑞西へ連れ出し、すつかり盗んでしまった。その中には飛行機の技師も居た。

氏はその設計圖を海軍に提出して、ホツと胸を撫で下ろした。海軍は氏の偉大なる功績に對し、依然として誠意を見せなかつた。その仕事は、吳、横須賀、三菱、浦賀、川崎造船へ均等に與へた。併し、松方氏は「國家のためだ」と云つて、一言の不平も漏らさな

かつた。

氏は、歸りには全く懷中無一文だったが、意氣軒昂として、凱旋將軍の慨があつた。

松方氏が、スパイをカムフラージュするために手を染めた美術のコレクションで、美術眼を啓發したことは事實だ。氏が歸朝するや、富豪の美術死藏を慨して、神戸の小寺謙吉氏を説服し其邸を美術館にしやうとした點から見ても分る。その資金として、一三百萬圓融通がついたが、例のパニツクで惜しいかな挫折してしまつた。

強き國家觀念

松方氏が軍事通として既に一隻眼をもつてゐたことは、前にも書いたが、例の軍縮會議の際も、松方氏がブライアン、加藤全權の間を斡旋して、

「比率などは云ふな、三千噸以上の軍艦を造らぬ協定一本槍で進め」と建築したが、幣原軟弱外交がこれを阻止してしまつた。

松方氏は、根つからの事業家ではないと再び云ふが、前述のガソリンの場合と同様、曾つて、薄板が年二三千萬圓輸入されることを慨して、川崎造船で、製作に着手し成功したそれを賣出せば非常に儲かつた、だが株主が半疊を入れたので、

「國益だから披露したまでだ。買つてくれとはいはぬ。ケチをつけられたのでは、俺はいいが、工場や職工が可愛さうだ」

と云つて、製造を中止してしまつた。

松方氏が凡庸事業家と異なる點は、氏一流のイデオロギーたる國家觀念と、職工諸君に對する眞の涙の温情だ。

近代の實業家で、眞に天下國家を憂ふる者は、松方幸次郎氏と金子直吉氏だと喝破したものであつたが、松方氏と金子氏は、眞の知己と斷すべきだと、筆者は思ふのである。松方氏は要するに、事業家ではない。偉大なる政治家といふ氣がしてならない。

進藤信義氏を始め、氏の親友達が機會ある毎に、松方氏を引張り出し、曩には滿鐵總裁

の椅子を與へやうとし、或は駐米大使に擬したりして居るが、實に美はしい友情の發露でもあり、又、人物經濟上から云つても、氏の如き一代の風雲兒、人間味の豊かな快男子を一度は大臣の椅子にすはらせ、非常時日本の國政を料理させて見たいものだ。七十四歳だとは云へ、松方幸次郎氏の頭は、脉々として生きて動いて居るからだ！

氏の國家觀念を如實に物語るエピソードがある。明治四十二年氏が衆議院議員に當選した時。實業之世界社々長野依秀一氏が代議士としての感想を聽く爲、氏の門を叩いた。

「松方さん、議員に當選してお芽出度う御座いますが、若しこれからあなたの仕事の上
に不利な議案が提出されたらどうします……」

「それや君聞くまでもないじやないか、國益になることを決定するのが議員の任務だ、だから川崎造船所の如きも國益にならぬと云ふことになつたらいつ何時でもブチ壊してしまつて宜いよ……」

と、實に徹底した氏の信念が窺はれるではないか。

又氏が獨逸潜水艦の構造設備を調査する内命をうけて渡歐した際、正義觀によつて佛蘭西から浮世繪を買ひ戻したことは前述の通りだが、抑も、この浮世繪と云ふものは、日本固有の風俗、文化、等を知るに最も好適の藝術品である。

そしてこの浮世繪によつて、日本を紹介したものであるが、然も日本には無い様な藝術品が皆外人の手に依つて買ひ占められてゐると云ふことは正に日本の恥だ。

歐米人は國家的に尊重すべき藝術品が、國外に出ることを極端に厭つてゐるが、これは日本と同様である。日本を紹介したものが、日本にはなくて皆外人の手に渡つてゐるとは何事だ。と云ふ國家觀念からであつた。

氏がインフレーションの如くに思はれた様に、『金解禁すべからず』と主張されたことも、日本には金の資源が少ない。金は一種の軍需品である。金を出さずに紙幣を出せと絶叫されたことも國を憂ふるの一念に外ならなかつた。

當時金子直吉氏等は氏と同一意見であつたが、武藤山治氏の如きは猛烈な反對論者であ

つた。然し後日同乗の車中で

『松方君、君の議論の方がよかつたよ』と氏の議論を肯定されたと云ふ。然も氏の政府紙幣の發行説は今や實現されることになつたのである。

更に又氏が日ソ石油の經營に當つてゐる頃、ガソリン節約器の發明に十數年の長年月に亘つて苦心研究を重ねて來た發明者岸政五郎氏の苦闘は、たゞ松方氏に認められ、研究費其他多大な援助を得て、遂に理想に近いガソリン節約器 K、S 特許セーヴァーを完成することが出來たが、これに對して氏は

『御國の爲になる事だ大いに研究して、たとへ三分でも五分でも節約が出來れば結構だ揮發油需要量の九割五分は自動車消費してゐるのだから、國家的見地から見ても、一刻も早く完成させねばならぬことだ』

と激勵された。今日までの氏の歩みを眺める時、全く氏の足跡は一つとして國家的見地に立脚しないものは無かつた。この度の日支事變に際しても

『支那で戦つてゐる將兵の事を思ふと、ちつとしては居られませんぜ、内地に居る者が兵隊でないから戦争に行かない特權を持つてゐるかの如くに考へる者もある様だが、とんでもないことだ』

と疾走する車中で筆者に話しかける氏には童顔の中にも、何かしら嚴肅さを思はせる英雄的なところがある。明治の元勳松方正義公の面影を連想せざるを得なかつた。

(附) 支那事變と我が財政

(昭和十二年七月臨時議會豫算委員會質問要項)

松方幸次郎氏述

一、支那事變と國民の覺悟

今回の事變は何故に起つたか、是は今更私が申し上げまするまでもなく、冀察政權の首

腦者なる宋哲元が、南京政府の重壓に押されて、自己保身に汲々として冀察政權成立の精神に反して逃避的態度をとるやうになり、又一方には彼の麾下の二十九軍の將兵に對し、南京政府の巧みなる抗日決戰の宣傳が奏効致しまして、彼宋の威令も充分には行はれないこととなり、我方と特殊なる關係にあらねばならない二十九軍の將兵が、公然と抗日即時決戰を叫んで我方に挑戰的行爲に出るようになりましたので、昨年來屢々日支兩軍間に事件を惹起したのでありますが、其の都度我が方の隱忍自重に依り、僅かに事無きを得て來たのであります。然るに去る七月七日北京部外の蘆溝橋附近に於いて演習中の我軍に馮治安麾下の部隊が不法射撃を加へました事件は我が方の嚴たる事件不擴大の方針に則り、現地の將兵は眞に血涙を吞んで忍ぶべからざるを忍んで事件解決に努力致しましたにも拘らず、此の日本の眞精神をも、日本には戦争する力が無いのでありと誤認し、北支中央化は此の秋とばかり、梅津何應欽協定を蹂躪して中央軍を續々北支に浸入せしめ、愈々不法に挑戰的行爲を繰り返して來ますので、隱忍自重して來た我が軍も自衛上已むを得ず應戦し

て、遂に平津の地に兵火を交へるに至りました。

是は直に又上海に飛火し、南京政府は上海停戦協定を無視して、中央軍の精銳を上海に集結して堅固なる陣地を構築、一舉に共同租界を攻略して我が居留民を全滅せしめんとの態勢を示し、我が陸戦隊の將兵に不法挑戰的行爲を重ねるに至り、又一方察哈爾に於ても土肥原秦徳純協定を蹂躪して滿洲國々境に大軍を集結して、彼等の所謂失地回復を策謀するなど、南京政府は日支間の汎ゆる條約を蹂躪して日支即時決戦を露骨に示し、最早和平解決の道は絶たれ開戦は時期の問題と見らるるに至りまして、我が方の隱忍自重事件解決の努力も遂に空しく自衛上已むを得ず應戰することとなつて、兵火は支那全土に繰り展げらるることとなりました。

斯くて今や我が正義の軍は、全支に亘つて着々と其の皇威を宣揚しつつありますことは皆様既に御承知の通りで御座いますが、是がために、我が忠勇なる陸海軍の將兵諸士が、汎ゆる困苦缺乏や障碍を突破克服して、一死奉公の大精神を以て、一身を犠牲として――

あの毎日の新聞紙上に現はれて居りますやうに、眞に其の戦闘場裡に於ける奮戦振りは、壯絶とも、凄絶ともそれは何とも形容することの出来ない、實に勇敢無比にして義勇奉公の誠を如實に顯現せられたもので、此のお働きに對しては我々銃後の國民は、嘗々有難いことで御座いまして、肅然と襟を正して、衷心より感謝と感激を捧げるばかりで御座います。

此の事變の將來はどうなるか、又軍事行動は何時終熄するであらうかといふことは、勿論今日より其の豫斷を下すことは出来ませんが、戦は或は長期に亘るやうなことになるかも分らないのであります、では國民諸君の此の事變に對する覺悟は怎うであるか、此の點は政府も夙に考慮して此の非常時局に際し、舉國一致、國民精神の昂揚を計るため、朝野協力して國民精神總動員の運動を起すこととなり、既に去る九月十一日、日比谷公會堂に於いて運動首途の演說會を開催し、近衛首相以下各大臣が國民大衆に呼びかけたのであります、其の演說會に於いて近衛首相は、

『國家の一大事の前に、國內の凡ゆる階層が協力一致して義勇奉公の誠を盡くすといふことは、我が日本々來の姿であります。現に去る九日終了致しました。第七十二議會に於て、老なる豫算が兩院とも全會一致を以て一瞬の間に協賛せられましたる一事を以て致しましても歴然たる事實であります。斯の如きは日本以外の國家に於きましては、容易に理解し難きところでありまして、特に日本内部の分裂を見越して、排日強行の理由として來ました所の支那政府の如きに對しては、意外なる精神的打撃を與へたことと思ふのであります。』

と述べられて、時局に對する我が國民精神の緊張昂揚せることを高調して居られますが、まことに國家の一大事に直面して、國內の全階級は凡ゆる對立抗爭を解消し、眞に舉國一致、國民精神は昂揚して寸隙もないのであります。

併し此の事變が若し長期に亘るようなことになると、又軍事行動は一旦片付いても時局收拾が長引くやうなことになる、此の緊張せる國民精神に弛緩を來しはせぬであらうか

此を私は憂ふるものであります。我が國民共通の缺點は『熱し易いがまた醒め易い』と云ふことであります。所謂せつかなことでもあります。是は東洋の盟主を以て任ずる大國民として、實に遺憾千萬なことでもありますから、國民諸君の深重なる自省に依つて是非共、此の缺點を匡正しなければならぬと思ふのであります。

抑も今回の事變は、簡單に戰爭に捷つただけでは目的を達することは出來ないのであります。則ち今回の軍は、日本が支那を侵略する爲めに起されたものではなく、日支提携を基礎とした我が不動の大國策に對して、正面より反對する南京政府並に其の軍閥を覺醒せしめて、日支親善の防壁を除去せんとするもので、決して純朴無垢の全支の良民を對手とするものではありません。第七十二議會の開院式にあたりましては、畏くも天皇陛下より親しく賜はりました勅語の中にも

帝國ト中華民國トノ提携協力ニ依リ東亞ノ安定ヲ確保シ以テ共榮ノ實ヲ擧クルハ是レ朕カ夙夜軫念措カサル所ナリ中華民國深ク帝國ノ眞意ヲ解セス濫ニ事ヲ構ヘ遂ニ今次ノ事

變ヲ見ルニ至ル朕之ヲ憾トス今ヤ朕カ軍人ハ百難ヲ排シテ其ノ忠勇ヲ致シツツアリ是レ

一ニ中華民國ノ反省ヲ促シ速ニ東亞ノ平和ヲ確立セントスルニ外ナラス

と拜するのでありまして、日本は支那を侵略するものにあらずして、日支兩國は相提携協力して共存共榮の實を擧げやうといふのであります。此の日本の深大なる慈念を支那の政府や軍閥はどうしても背じないのであります。勿論支那が此の歪曲を反省しないことに付いては、種々の原因がありますが、兎に角、現在南京政府をリードして居ります所の歐米派や、親露派の迷夢を徹底的に打破して覺醒せしめるより外に方法がないのであります。此の爲めの戦争であり、従つて所謂いふ所の戦争と事情を異にし、事變といふ所以も是にあるのであります。

以上に因つて略明瞭なるが如く、一旦軍事行動は終結しましても、後片付けに相當の時日を要するものと考えなければなりませんから、其の期間國民が緊張して精神を持續することは、中々容易であるまいと思ふのであります。併し乍ら前にも述べましたやうに、

今回の事變は我が國將來の爲に、將又東亞平和確立の爲めに、どうしても遂行しなければならぬ不可避の現前の事實でありまして、先の近衛首相の演説の中にも

『こと茲に至りましては、吾に日本の安全の見地からのみならず、廣くは正義人道の爲特に東洋百年の大計の爲にこれに一大鐵鎚を加へまして、直ちに抗日勢力の依つて以て立つ所の根源を破壊し、徹底的實物教育に依つてその戰意を喪失せしめ、然る後に於て支那の健全分子に活路を與へましてこれと手を握つて、俯仰天地に愧ぢざる東洋平和の恒久的組織を確立するの必要に迫られて來たのであります。このことたる、吾々が今日これを解決せざれば、吾々の子孫が更に大なる困難の下に、いづれの日にか解決を必要とするものであります。果して然らばこの日本國民の、歴史的大事業を吾等の時代に於て、解決するといふことは寧ろ今日生を享けたる我等同時代國民の光榮であり、吾々は喜んでこの任務を遂行すべきであると思ふのであります。』

とありますやうに、今回の事變は、將に時運に際會せるものでありまして、此の偉大なる

事業を吾々の時代に完成して、子孫に傳へますることは、是は實に無上の光榮であり、誇りでなければなりません。

私は國民諸君が此の崇高なる大事業を達成する爲めに、堅忍不拔の精神を以て、儼然として此の變事に對向せられんことを衷心より希望するものであります。皆さん此の覺悟さへあれば假令事變が長引くやうなことがありましても、凡ゆる障壁や困難を突破克服して我が正義は必ずや貫徹するであらうことを信ずるものであります。

我が正義を世界に宣示せよ

以上のやうな経緯から惹起された事變ではありますが、偕て之を第三者たる世界各國より見ますると必ずしも、日本の正義を認めて居るとは言ひ難いのであります。否それどころか、支那在外使臣の泣き上手の宣傳も手傳つて誰でも弱者には同情し易い傾向がありますのと、世界に於ける最後の許されたる市場に於ける日本の獨占的なる進出を嫉視し、此

の機會に何等かの利權を獲得しやうといふやうな、野心を持つ國もありませうから、どうしても日本は侵略國であるとか、いや弱い者いぢめをするとかいふ風に見られ勝ちなのであります。随分ひどいことを書いてある新聞もある様であります。

それに最近南京や、廣東や其の他の都市を空爆するやうになつてから、世界の輿論は頗る硬化し、國際聯盟等も騒ぎ出したやうで、世界の日本に對する誹謗は益々熾んになつて來たやうであります。日本の外務省が、支那側のデマ宣傳を誤信して騒ぎ立てる世界の迷蒙を充分に打破することの出來ないのは眞に遺憾なことであります。

此の秋に際し、今回政府が、我が正義を世界各國に理解せしめるために、來月早々に歐米にそれ／＼の使節を派遣することになつたのは、眞に喜ぶべきことであります。併し忌憚なく言へば、私はやり方が少々緩漫だと思ふ。是は一日を争ふ問題だ。一日早ければ早いだけ、それだけ効果は多いのであります。支那が充分宣傳濟みの處へ、そして日本に對して悪感情を抱いて居る處へ、折角日本から出かけて行つても、結局は辯解して歩くや

うな形になつて、使節の努力も容易であるまいと想像されるのであります。

併し、兎に角使節を派遣することは結構なことでありますから、派遣する以上は、日本が現にやつて居ること、やらうとすることを率直に明瞭に量々と宣示披露して、日本の行動が正義人道に反するものでないことを、世界各国に充分認識せしめるやう、懸命の努力を要望するものであります。

此の日本の正義は、世界に宣示すると共に、當の支那四億五千の純朴なる良民に、尤も能く我が眞意を諒解せしめるやうに、出来るだけの努力をしなければならぬと考へるのであります。

三、事變と財政經濟

次に此の事變に就て尤も重大なる關係ある我が財政經濟の將來はどうなるであらうか、是は相當に憂ふべきものがあるのではあるまいかと考へるのであります。前議會に於て五

億圓を、今議會に於て二十億圓を、合計二十五億圓の軍事臨時費を可決し、此の大金が全部公債に依つて賄はれるのでありますから、今後公債發行の増加に伴ひ、公債政策の運用に付いては、中々容易ならぬものがあると思ふのであります。

今日までにも日本では公債を募集するに、其の應ずる資力が、即ち消化力がどの位あるかといふには、屢々論ぜられて來たのであります。且て井上藏相は六十億以上は不可ぬと言つて居られたが、滿洲事變以來、毎年多額の赤字公債を發行して來て、兎に角、百億以上にも行つてしまつた。モウ是で飽和點に達して動きがとれないかと云ふと、私はやりやうに依つては行くのであるといふ考へを持つて居るのであります。

此の事變はいつ終結するか、將來のことは分らないが、今後も相當に巨額の金が入用であると思へなければなりません。若し戦争が長引いて行つて、金がドシ／＼入用になつても、是は飽くまで闘つて行かねばならないのでありますから、其のためには、私は、大藏大臣なり或は誰でも現内閣で最善の方法を樹立して、此の巨額の公債發行が、國民の經濟

上に出来るだけ悪影響を與へないやうに、考慮して載きたいのであります。國さへ残つて居れば、いつか偉い人が出て来て、財政位はどんなにでも立て直すであらうから、そんなことを心配してゐては、戦争が出来ないではないかと云はれる人があるかも知れませんが併し出来るならば、そんなことのないやうにした方が、宜いものではないかと、私は考へるのであります。否、是非それが望ましいことであると思ふのであります。

四、公債に代る政府紙幣の發行

今日公債を募るのにシンチケートに持つて行けば、シンチケートの人が怒つて『一億圓割當てられた』『此の次は俺なんだ』又今後幾何割當てられるか知れぬからと言つて、貸出しを中止するばかりではない。今まで貸出して居たものまで、取立てやうと云ふ意氣込になつた。其の結果は極々と經濟界の困難を招來して居ります。斯る金融が梗塞しては、事業をやるものは參つてしまふ。斯ふ云ふことを今後やつて行けば、折角生命を捧げて戦

つて呉れる人々に對しても、申譯のないことになりはせぬか。是は實に憂慮に堪へぬものであります。

就きましては先年世界大戦争の時、イギリスで執りました一つの財政政策、公債募集の方法があります。公債の募集と云ふと語弊がありますが、金を賄ふやうにした方法があるが、私はそれを此の時期に於て日本でも實施したらどうかと考へるのであります。即ち千九百十四年即ち大戦までは、バンク・オブ・イングランドは、トレヂュリー・ノートと云ふものは、ゴールド・サバーレンといふものゝ外に二千萬磅ばかりしか發行して居なかつた。

併し戦時になりました、千九百二十八年になるまでには、二億四千萬磅トレヂュリー・ノートといふものを發行して居る。それは何にも後國に金貨が準備してあるといふ譯でもなく、何にもなしにやつたのである。それで私も今後國債を募る時に、其の募集額の半額位は政府紙幣といふものを發行すれば、餘程金融界も緩和して行くのではないかと思ひま

す。勤くとも貸出しを中止したり、貸出しを無理に取立てるやうな、不健全な状態はなくなるであらうと考へるものであります。

今まで日本の財政経済と云ふものは、凡て本に書いてある固いやり方である。融通性と云ふことが一寸もない。是は時勢に依つて變化して行くべき筈のものであると私は考へる。

現にドイツなどの金融界は決して、破綻を來たして居ないのであります。それで我が國でも、今後公債を募るにも、引換に今までの日本銀行の紙幣と言はずに、國家の紙幣といふものを發行すればどんなものか、さうすれば随つて、金融界も緩和することゝなると思ひます。

兎に角經濟界の梗塞といふことは、是は時局重大の際、一日も速かに打開せねばならない、世上喧傳されるやうに、市中大銀行と、日本銀行や、興業銀行等の、特殊銀行との間に意志の疏通を缺いて居るために、其の摩擦からといふものではあるまいが、併し乍ら、兎に角ヴェロシテー・オブ、サーキュレーションといふものが非常に鈍いものである。是が

通貨の循環の速力が遅いほど梗塞をし易い。是は私が申すまでもなく、皆さんも能く御承知のことと思ひます。即ち今度十日間程株式が三割下つた。三割五分下つたと云ふことは是がない譯なのである。それで私は、今日の状態となつては、政府はモウそんな銀行家に行つて居る時ではない。自分の手のもので、此の政府紙幣を發行するやうな方法を、一日も速かに執るよう希望するものであります。

此の政府紙幣發行に就いて、私は第七十二議會に於て藏相に提議した所、賀屋藏相は左の如く答辯された。

『政府紙幣の發行であります、是はお話の通りのお話をやらうと思ふ。高橋さんといふ偉い人がありまして、市場から公債を募集しないで、日本銀行引受といふことを先年からやり出した。是は市場から通貨を吸上げないで、必要なものを日本銀行に引受けさせて、政府の支拂ひに充てさせますから、丁度政府がノートを發行して、それで通貨が潤澤に流通します點は、御示しのことと同じ結果を生ずる。而もそれが政府の不換紙幣などでない

のですから大變工合が良い、さう云ふ趣旨で此事變の初めには兎角警戒に過ぎ、梗塞勝ちなものでありますから、日本銀行引受のみで、當分發行しまして金融の緩和を圖つて行きたい、斯ふ云ふやうに考へて居ります。

金融が梗塞して公債消化力が不足して居る以上、此の日本銀行引受といふことに依つて其の緩和を圖ることも勿論必要でありませうが、それをやる位なら今一步推進して、政府紙幣を發行するやうにしたいものであります。

公債を發行すれば何も利息を支拂はねばならぬが、政府紙幣を發行すれば何も利息は要らない、さうするとそれだけ國家の財政が良いといふことになり、政府紙幣も日本銀行紙幣も、經濟界に及ぼす効果は同じであります。

賀屋藏相は此の政府紙幣といふものを、不換紙幣の如く言つて居られるが、是は大なる誤解でありまして、政府紙幣は決して不換紙幣ではありません。在來の日本銀行の紙幣を更に擴大強化したもので、國家の名に於て發行する紙幣が、不換紙幣であり得る道理はあ

りまん。私は公債が無ければ金が出ない等といふ僻見を政府が捨てて、自分の手で金を拵へると云ふことを考へて頂きたいのであります。

勿論是は程度がある。併しそこは偉い大藏大臣に一任するより外に途はありません。それを無暗にやられては或は悪性インフレーションと云ふものになるかも知れぬ。併し私は非常時には又それに應ずる非常時對策といふものを當て嵌めなければならん。それを實行して初めて國運の進展を促す原動力となると考へるものであります。

古諺にも「國亂れて忠臣出で、家貧しうして孝子出づ」とあります。此の日本未曾有の非常時國難に際會して、必ずや偉大なる人材が出て來て、單に財政經濟ばかりでなく、汎ゆる方面の難局を打開して、國運の隆昌を計るであらうことを、古來の我が歴史の事實より見て、私は深く信じ且つ期待する次第であります。

五、産金政策と爲替對策

次に私は、此の非常時局の經濟國難打開策として、産金政策即ち積極的に産金を奨勵して、どしどし金を掘り出し、常に金を豊富に持つて居れば、對外爲替相場の問題も解決し又國內經濟の振興を圖ることも出来るかと考へるのであります。

賀屋藏相は輸出輸入の均衡を圖つて、エキステンヂ・レイトを一志二片で維持すると言つて居られるが、是はいつ頃まで此のエキステンヂで行かうといふ見込であるのか、或は今行くが後は知つたことでないと言はれるのか、又如何に長期に此の戦が続いても此のエキステンヂ・レイトで行かうと云ふ考へで居られるのか、私は此の事を議會で質問したのであります。藏相は

『經濟上のことでありますから、四年先、五年先迄もはつきりと言ふ譯には参りません只今の所何年になつたら變へるといふ考はありません。殊に斯ふいふ事變のやうなこと

が続いて居ります際は變へない方が極めて安全で適當である。其の方針であります。』と答辯されたのであります。私は金を始終現送して居れば兎に角、一志二片といふやうなもの、條件なしに行くものではないかと思ふのであります。

今日世界で産金國としては、成程サウスアフリカ、ソ聯邦、又カナダ、アメリカ等でありませうが、我が日本も滿洲國や朝鮮もあります。日本の産金も計算して見ますと、相當産出があり得るのであります。それが出ないとは、それを掘り出す資金が無いためです。紙の金で金の鑛が出て來るといふなら、私はこれほど確かなことはないと思ふのであります。政府はどしどし金を貸してやつて産金の増加を計るべきであると思ひます。

尤も是は後で金で還すといふ約束で、産金者と契約しておいてやるのであります。是をしないで——成程此の頃は産金といふことに力を入れて居るやうで、朝鮮でも澤山出來る。滿洲國では五箇年計畫で五千萬或は二億圓出來るといふ書付を私は見たのであるが、さういふ風にやれば、一志二片といふものはやつて行くことが出來やうが、若し産金

が無かつたら——増加することがなかつたら、私は一志二片といふものは輸入が非常に入つて來るといふ點からいかぬものではないと考へるのであります。

輸出は今後は商工大臣の書付を見ても、時とすると抑制することがあると云はれる。成程抑制しないでも、狀況が、マレー・ペニンシュラとか、支那とか、又イギリスなどはアフリカ邊りまでも力を入れて日本のマーケットを呑食しやうといふのであるから、輸出といふものは自然的にも餘程減つて來るのであります。それには成程商工大臣の方では、又輸入を抑制すると云はれるのであらうが、軍需品の輸入といふものが多くて——戦に捷たうと思へば、出来るだけ軍需品は滞り無く輸入して行かなくてはならぬ。さうすれば金といふものが足らずに——一年位は今の勘定にして十一億圓あれば、モウあるだけの金を出して行けば、相當行きませうが、將來は中々難しいものではないかと思ふ。それで産金のことに付いては、今まで種々の計畫もあるさうであります。益々産金をするやうに、金を産金業者に立換へて頂きたいのであります。

是で思ひ出すことは、昔可笑しい事ですが、紙幣整理時代に、郵船會社が出来た時など八萬の配當を政府が保證したといふので、二箇年間も商賣を開かずに、又株主總會も開かず、八朱だけの配當を送つてやつたと云ふことがあるさうであります。さう云ふ様な風に、一寸は大膽にやつておけば、決して心配することはないのではないかと思ふのであります。あまり心配ばかりして消極的にのみやつて居ては、飛躍といふものは絶対にない政府が産金に金を貸すといふことになれば、實業家は大に喜んで仕事をやると思ひますから、金もどし／＼出来るやうになると思ひます。

今まで政府は、此の問題ばかりではありませんが、種々と献言しても、考慮中／＼で中々埒があかず、遂に出来ることをみす／＼出来ず終つてゐるやうなことも多々あります。どうぞ斯ふ云ふ時代ですから、大いにやつて頂きたい。外のことは違つて、土地から金を取るのだから、是ほど樂なことはないのであります。尤も其の鑛脈を見出すことは骨でありませうが、併し朝鮮でも滿洲でも又内地でも、脈は相當ある様に聞いてゐます。それ

をただ金が無いために掘り出すことが出来ないで、經濟上にも財政上にも多大の支障困難を來して居りますことは、これは如何にも残念千萬であります。

兎に角出来るだけ金を出して、一遍一志二片と決めた以上は、せめてこれだけは維持するやうに努めなければならぬ。それでも又それさへ怪しくなれば、斯ういふ方法もあります。即ち軍需品に對しては一志二片の勘定で現送する。併し白粉とか其の他の品物に付いては、マーケット・エクスチエインチでやつたら宜いではないか、エクスチエインチといふものを二様にして、軍需品に對するエクスチエインチはオフィシャル・エクスチエインチでやるといふことにすれば、軍需品の輸入の不足するやうなことはないと思ふのであります。

ドイツなどには爲替管理局といふものの外に、商品管理所といふものがあるさうであります。日本もそう云ふ風になつて行かねばただ單に爲替だけの管理では充分でないと思へるのであります。

是を要するに根本問題は金にあるのでありますから、今後は政府も腰を入れて産金業者に金を貸して、積極的に産金の奨励に乗り出して頂き度いものであります。

六 馬の輸入と農家の救済

今回の事變で馬が徴發されて居ります。初めはそれ程でなかつた様であります。現在では相當多數に上つて居るやうで、此の爲に農家は非常に困却して居る。此の儘で行けば來年はどうなることかと大層心配して居ると云ふ話を聞いたのであります。馬が足りない爲に肥料も少い、これは先達て或所で農林大臣より聞いたのであります。是では百姓は益々困るばかりであります。

農村救済といふことは、今日までも屢々問題となり、又或る程度までは其の救済も講ぜられて居ることと思ひますが、それでも日本の百姓程悲惨なものはあるまいと思ふのであります。今更私が事新らしく申し上げるまでもなく、日本は瑞穂國であります。農を本と

して出来た國であります。舊幕時代も士農工商と云つて、農を以て尊しと致して居りました。此の農本國の農家が今日のやうに窮乏疲弊して居りますことは、是は爲政者の考へなければならぬ重大問題であると私は考へるのであります。

殊にイギリスでも、ドイツでも、食物に悩んで居りますのに、此の狭い土地に一億に近い人口を擁して居て、尙且つ今日お互に食物に付いては何一つ困つて居ないといふことは、是はとりも直さず全くお百姓さんのお蔭であります。此の尊い五穀の耕作をするに必要な馬を取り上げ、肥料を拵へる助けをしてくれる蓄類をなくして了ふことは、已むを得ない事とは云ひ乍ら、眞にお氣の毒なことであります。

今次の事變に依る馬の徴發は萬已むを得ないことでありますが、又お百姓さんも馬が無くては困るのでありますから、政府當局者は是が補充の途を講ずべきであると思ひます。日露戦争當時にも、徴發馬に代へる爲めに、海外より馬を買入れたといふことを聞いて居ります。今日の情勢は其の當時よりも更に一層必要の度は増してゐる筈でありますから、

政府當局は陸軍當局とよく相談して、至急海外より馬を買入れる方法を立てて農家の馬匹難を救済するやうに取計つて、頂きたいものであります。

是を海外より輸入するには金も相當に掛るでせうが、馬も一種の軍需品でありますからどんな都合しても整備すべきで、農家の窮困を救済すると共に、軍の進運上にも萬遺憾なきやう善處されんことを希望致します。

七 世界解決の關門を開く躍進日本の相

滿洲事變を契機として、躍進に躍進を續けて來た我が日本が、東洋の和平を確保する爲めに、國際正義に立脚せる大陸政策を執りつつありますことが、動もすれば日本が侵略國であること云ふ誤解を受けますことは、眞に遺憾なことではありますが、日本は決して領土的の野心を持つものではありません。是は過去の我が國の動向を靜觀すれば、火を賭るよりも明かな事實であります。

今や赤化の魔手は、南京政府やその軍閥と手を握つて、支那全土を掩はんとして居り、その爲に日滿兩國は多大の脅威を受けつゝあるのであります。抗日侮日に狂奔して手段を撰ばなくなつた南京政府は、再び聯露容共の苦杯を採用し、抗日は戦闘の一路を辿つて居るのであります。日本は此の正義人道の敵である所の謬まれる南京政府や、其の軍閥を徹底的に覺醒せしめて、四億五千萬の純朴なる良民を救済し以て日支共存共榮の實を擧げ、彼等に安居樂業の喜びを與へんとするものでありまして、此の事たるや眞に日本が天より下された大使命で、其の行動は俯仰天地に恥づる處なく、其の大慈念は日本皇道精神の發露であります。

日清戦争以後四十餘年、支那指導の大精神を謬つた我が日本は、今後こそ凡てを總決算して新しく出直すのであります。其の進む道は一途であります。盡すべきを盡せば、もう第三國の干渉だの仲裁だのと云ふことに耳を藉さず、聯盟脱退を宣した日本は、どこまでも獨立獨歩でゆかねばならない。假令國際的には孤立しても、それは天と俱に孤立して居

るのであつて、何ものをも恐れる所はないのであります。

今次の事業は實に天が日本をして世界解決の關門を開かしむるに至つたものでありまして、我が正義の軍は東洋永遠の平和を確立せんとするものであります。今や躍進日本は、世界平和確保のために、我が皇道の正義を世界に光被顯現せんとする其の第一歩を踏み出したものであると思ひまして、私は衷心より大いなる喜びを感ずる次第であります。

—【完】—

國家中心主義の人
前日ソ石油會長
松方幸次郎氏
(附)支那事變と我が財政

昭和十三年六月廿七日印刷
昭和十三年七月二日發行

【非賣品】

不許複製

編者 栗原俊穂
東京市麻布區霞町四番地
發行者 橋源三郎
東京市麻布區霞町七番地
印刷所 日本教育資料出版部
印刷人 中村福松

發行所 東京市麻布區霞町四番地
日本教育資料刊行會
電話赤坂482四一九番
振替口座東京七九三三番

既刊評傳

小賣店繁榮策の重點 落合多賀一氏述	證券界不況の原因とその對策 大塚小一郎氏述	財界名士修養談 橋本喜作氏述	本邦隨一の鑄造家 高橋才次郎氏	大阪財界の巨頭 稻畑勝太郎氏	肥料界の先覺者 鈴鹿保家氏苦闘傳	本邦貸家貸地主 大井伊助氏	苦學力行の奮闘家 小野義夫氏
大阪財界の偉傑 田中太介氏	海苔と茶の店 市川金作氏述	財界名士縱橫談 渡邊省二氏	尺八界の巨匠 中尾都山師苦闘傳	軍需工業界の覇者 笹村吉郎氏	銅管製造の覇者 白石元治郎氏	本邦製紙界の功勞者 御法川直三郎氏	本邦製紙界の巨人 石川正作氏

既刊評傳

小管恭太郎氏	眞剣眞實の奮闘家	堀井卯之助氏	健康第一主義の人	赤星陸治氏	本邦造船界の翻者	濱田彪氏	廣池博士のモラロジー	大塚榮吉氏	岡本櫻氏	矢野恒太氏と石坂泰三氏	苦學力闘の士	山下恒雄氏
篠崎宗吉氏苦闘記	智力富源開發論	梅浦健吉氏	財界名士修養訓 菊本直次郎氏	財界名士修養訓 山本留次氏	財界の大世話役	郷誠之助氏	財界名士修養訓 藤田讓氏	財界名士言行錄 小林八百吉氏				

既刊評傳

本邦糖業界の元老	武智直道氏	本邦軍需工業界の翻者	松方五郎氏	花嫁學校女子科學塾	松井たつ女史	電球界の驚異的發展と 其の發明を繞る人々	大河内正敏氏述	三井王國の指導有	南條金雄氏	財界名士回顧錄	高木陸郎氏	財界名士一家言	牧野元次郎氏	
帝都洋品界の逸材	山路芳雄氏	銀行生活回顧錄	菊本直次郎氏	本邦化學工業界の偉傑	野口遵氏	財界名士修養談	林安繁氏	古今名詩選抄	商工經營の眞髓	中山太一氏述	保險外交界の鬼才	田村久四郎氏	精神主義の人	中村庸氏

既刊評傳

吉住福松氏	本邦造花王
南莞爾氏	火災保險界の第一人者
山口正造氏	富士屋ホテルの經營者
岡野順吉氏	新宮館主
丹治經三氏	保險界の新人
小松桂之助氏	前小松熱鍊常務
土方久徵氏	一人一業主義の權化
瀬下清氏	奮闘努力の人

菊池寛氏	國産印刷機の威力と其の發明を繞る人々
佐藤義亮氏	文壇の大御所
西野惠之助氏	出版界の第一人者
有賀長文氏	業界屈指の獨創家
千倉豐氏	三井王國の元老
森廬昶氏	近代名士一家言
三谷一二氏	昭和財界の奇傑
	財界巨頭修養訓

既刊評傳

池貝式施盤の發明家 地貝喜四郎氏の思出	立志奮闘の信仰家 大澤佳郎氏
酒仙奮闘の士 三宅川百太郎氏	日本電氣工業界の第一人者 山口喜三郎氏
倉庫界の第一人者 三橋信三氏	本邦化學工業界の先覺者 棚橋寅五郎氏
馬場鏊一氏半生の苦闘史	國産獎勵買行の先驅者 島津源吉氏

本邦製紙界の闢將 足立正氏	本邦産業界の偉材 鮎川義介氏
古河王國の建設者 鈴木恒三郎氏	東株理事長 杉野喜精氏
味の素王國の建設者 先代鈴木三郎助氏と鈴木忠治氏	剛毅不屈の商傑 森濱三郎氏
熱血至誠の人 山田敬亮氏	クリーニング界の第一人者 五十嵐建治氏

既刊評傳

三味線文化譜の創案者

杵家彌七女史

住友王國の徳望家

小倉正恒氏評傳

誠を語る

前三十四銀行副頭取 一瀬糸吉氏述

水力電氣工事の霸王

飛島文吉氏苦闘傳

本邦製粉界の先驅者

正田貞一郎氏

立憲政友會總務

大口喜六氏の半生

工學博士

野村龍太郎氏の少年時代

北海道開發の先覺者

東武氏苦闘傳

洋畫壇の權威

中村不折氏

帝都食堂界の覇者

加藤清二郎氏

貴族院議員

坂本俊篤氏の少年時代

本邦重農工業界の巨人

伊藤英夫氏

南洋開發の先覺者

松江春次氏

日本劇界の寵兒

曾我廼家五郎のあゆみ

終

